

“美しい言葉”の裏を暴く ―ホスピス住宅ビジネスの報道から見えた現実―
2026年6月11日 共同通信社 データ調査報道部 編集委員 市川 亨さん

不正をなくすことと、人の生活を守ること

私はかつて、奈良県の医療政策を担当する立場で、大和郡山市の山本病院をめぐる診療報酬不正受給事件の摘発に関わりました。

この事件では、生活保護受給者の医療費が医療扶助によって公費で賄われ、患者本人の窓口負担がない仕組みが悪用されました。

貧困ビジネスを行う業者が、路上生活をしている人たちに生活保護を受給させ、県境を越えて病院へ送り込む。病院では、医学的な必要性に乏しい検査や治療が繰り返され、その費用が診療報酬として請求されていました。

さらに、利益を優先した医療がエスカレートし、本来は手術の必要がなかった患者に肝臓の部分切除術が行われ、命が失われる事態にまで至りました。

この事件の全容を明らかにするためには、医療行政だけでは対応できませんでした。

奈良県警、大阪府警、県庁内の複数の部局、大阪府、厚生労働省、近畿厚生局、そして報道機関など、多くの組織との連携が必要でした。

それぞれが持つ情報を持ち寄り、組織の壁を越えて動く。その大きな連携を可能にしたのは、当時の奈良県知事による明確な決断と指揮でした。

その結果、2010年には病院長らの逮捕に至り、詐欺や業務上過失致死などについて実刑判決が言い渡されました。病院はその後、破産し、閉院しました。

この事件は、貧困ビジネスと悪質な医療機関の癒着だけでなく、医療扶助制度をどのように監視し、守っていくのかという課題を社会に突きつけました。その後の制度の見直しや、指導・監査の強化を促す一つの契機にもなりました。

一方で、このような深刻な事件に関わったからこそ、私は不正を取り締まることの難しさも痛感しました。

「不正を行う事業者は、行政が厳しく取り締まるべきだ」

これは当然のことです。

患者の命や尊厳を損ない、制度への信頼を揺るがす行為を、見過ごしてよいはずはありません。

しかし現実には、すべての不正を同じ密度で調査し、完全に排除することはできません。制度を守りながら、必要な医療や福祉を届け続けるためには、いくつかの難しいバランスを考える必要があります。

第一は、不正を立証し、処分するために必要な人員と時間です。

一つの不正事案を立件するには、資料の確認、関係者への調査、警察や関係部局との調整、医学的妥当性の検証など、多くの労力を要します。

データ分析で疑わしい事業者を抽出できても、事実を確認し、証拠をそろえ、処分や返還請求に至るまでには、さらに大きな行政コストがかかります。不正請求額の何倍もの費用をかけて回収することになれば、それもまた制度運営としては本末転倒です。

もちろん、金額だけで対応を決めてよいわけではありません。

患者の生命や人権を脅かす事案、組織的で悪質な不正、制度への信頼を大きく損なう事案には、回収額を超えてでも厳正に対応しなければなりません。

だからこそ、被害の大きさ、悪質性、反復性、患者への危険性を見極め、限られた行政資源をどこに重点的に投入するのかを判断する必要があります。

第二は、医療や福祉の担い手を確保する必要があることです。

制度の先には、実際にサービスを必要としている人がいます。

もちろん、高い理念を持ち、誠実に取り組む事業者が増えることが理想です。しかし、善意や使命感だけに頼ってでは、社会全体の需要を支えきれないこともあります。

適正な利益が得られることは、民間事業者が参入し、サービスを継続するために必要な条件でもあります。

問題は、利益を得ることそのものではありません。利益を求めあまり、患者や利用者の利益が置き去りにされることです。

第三は、規制を厳しくしすぎること、誠実な事業者まで疲弊させてしまう危険です。

不正を一件も起こさせまいとして、手続きや監視を過度に厳格にすれば、その負担は真面目に運営している人たちにも及びます。

書類や確認作業が増え、わずかな事務上の誤りでも厳しい処分を受けるようになれば、地域に必要な医療や福祉の担い手が撤退してしまうかもしれません。

不正を防ぐための仕組みが、必要なサービスそのものを失わせてしまつては、本末転倒です。

そして、もう一つ大切なのは、制度を最初から完璧につくろうとしすぎないことです。

不正や事故の可能性をすべてなくしてから始めようとするれば、新しい制度はいつまでも動き出しません。

制度は、実際に動かして初めて、使いにくさや抜け道、取り残される人の存在が見えてきます。不完全でも、まず始める。問題が見つければ修正し、また改善する。

安全性や公平性への配慮は必要です。しかし、制度を始めないことによって、必要な支援が届かない不利益も見落としてはなりません。

現在の日本には、この「まず始め、動かしながら育てる」という視点が、まだ十分ではないように思います。だからといって、不正を仕方がないものとして認めるわけではありません。

大切なのは、不正を完全にゼロにするという達成困難な目標だけを掲げるのではなく、患者の生命や人権を傷つける重大な不正を確実に見つけ、迅速に止められる仕組みをつくることです。

同時に、日々誠実に医療や福祉を担っている人たちが、過剰な負担によって疲弊しない制度でなければなりません。

医療や福祉の制度に、完成形はありません。

善意だけに頼らず、利益だけでも任せない。

不正を見逃さず、しかし誠実な担い手を追い詰めない。

完璧を求めて立ち止まらず、不完全なまま放置することもしない。

そして何より、制度を必要としている患者さんや生活者を、

その狭間に置き去りにしない。

おわりに

ミヒヤエル・エンデは『はてしない物語』の中で、

「しかし、それはまた別の物語。いつかまた、別の時に話すことにしよう」という趣旨の言葉を繰り返しています。

社会には、解決しなければならない問題が山のようにあります。

そのすべてを目の前にすると、どこから手をつければよいのか分からず、立ち尽くしてしまうこともあります。

けれども、私たちにできるのは、まず目の前の一つに向き合うことです。

すべてを一度に解決できない苦しさを引き受けながら、それでも一つを選び、そこに力を尽くす。その積み重ねからしか、物事は動き始めないのだと思います。

そして、一つの問題を解決すれば、また別の問題が見えてきます。

だからこそ、制度は一度つくって終わりではありません。まず始め、現場の声とデータに耳を傾け、問題が見つかるたびに手直しを続けていく必要があります。

「すべての本当の物語は、はてしない物語なのだ」

という言葉のように、医療や福祉の制度を守る仕事もまた、終わりのない調整と更新の積み重ねなのだと思います。

これまで私は、さまざまな場所で、多くの誠実な方々と出会ってきました。

制度や組織を動かすのは、仕組みだけではありません。目の前の人を大切に、よりよい方向へ進もうとする、一人ひとりの思いなのだと思います。

今日、市川 亨さんとお会いし、お話しできたことを、心からうれしく思います。

この出会いが、また一つの新しい物語の始まりになることを願っています。

今日のご縁に、心より感謝申し上げます。

令和8年6月17日（水）

みどりの杜病院

緩和ケア科 武末文男